

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 5 年 9 月 7 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 8名	(依頼数) 8名
地域アンケート回答数	0名	

※事業所記入

事業所番号	3870102088
事業所名	グループホームつばきの家
(ユニット名)	1階
記入者(管理者)	
氏 名	藤岡 和仁
自己評価作成日	令和 5 年 8 月 5 日

(別表第1の2)

【事業所理念】 医療と介護の連携により利用者が安心して生活できるよう支援する。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 取り組んだこと： ミーティングにて外部評価項目をピックアップして話し合い、グループホームにとって求められることや自分たちが行っているケアの意義について学ぶ機会を持った。 その結果： 職員が生活リハビリの大切さを再確認し、生活リハビリの提供を促す機会が増えたことで、一部の利用者ではあるが家事活動への参加が増えた。	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 松山市内南部の住宅街にある事業所は、周辺に大きな幹線道路があるほか、買い物や飲食などの利便性も良く、生活を送りやすい場所に立地している。事業所周辺には多くの店舗が立ち並び、生活を送る上で利便性の良い半面で、急速に田畑が住宅地に変わってきている。また、母体は医療法人であるため、事業所内に看護師が配置されているほか、24時間体制で医療連携体制が図られ、医師や看護師から必要に応じて助言が受けられることもあり、利用者や家族、職員には安心感がある。コロナ禍が続き、外出や面会制限を設けられていたが、5類移行後には制限が緩和され、感染対策を行った上で、徐々に地域や家族との交流を再開している。定期的に、管理者は職員との個別面談を実施して意向等の把握に努めるほか、日常的に職員からの相談にも応じ、メンタルヘルスの対策を行うとともに、有給休暇や希望休暇の取得を促進するなど、働きやすい職場環境づくりに努めている。
--	---	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内 容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	本人やご家族の希望や意向を事前に確認している。	◎	/	○	入居の契約時のほか、入居後に初期の段階で、管理者等は利用者や家族から思いや意向などを聞き、把握に努めている。また、日々の生活の中で、職員は表情やしぐさ、行動などを観察しながら、思いをくみ取るよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	介護記録を基に本人の生活状況や行動を準拠している。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	家族の来所持や近況報告の際には、本人の言動を伝えながら話すよう努めている。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	出来るだけ本人の発言は介護記録に残し、気づき等も記入した上で、必要に応じて職員間の申し送り等で共有している。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	定期的に複数の職員で意見交換をする機会を持ち、本人にとってどうかという話題で話すようにしている。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	◎	入居契約時に本人、家族に聞き取りをしている。入居後も関係づくりを兼ねて本人には聞き取りを続けるようにしている。不明な点はご家族に近況報告等で連絡をした際に確認している。	/	/	△	初回のアセスメント時に、利用者や家族から情報を聞くほか、友人や関係者から情報を得ている。把握した情報は、センター方式のアセスメントシートに記載し、職員間で情報を共有している。また、日々の生活の中で、新たに把握した情報は、個別記録のほか、申し送り等での情報共有に留まり、訪問調査日にはアセスメントシートへの追記や更新を確認することができなかった。今後は、介護計画の変更時など、アセスメントシートの情報が随時更新され、職員間で共有が図られることを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	本人がしている事、出来る事については出来るだけ詳細に介護記録に記入し職員間で共有している。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に務めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	センター方式の24時間シートに記載した上で、申し送りとして全職員が把握するよう努めている。必要であるなら申し送りノートに別途記載する。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	適宜職員間で話し合いを行い、必要に応じて事業所ミーティングで検討するようにしている。	/	/	○	月1回、実施するミーティングの中で、気づきやアイデアを出し合いながら、職員間でより良いサービス提供の検討などを話し合い、介護支援専門員が意見の取りまとめをしている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	明確な課題と思われるものを抽出し、ケアプランに反映し、サービスを提供するよう努めている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	出来るだけ本人が気持ちよく生活が出来るような内容となるよう努めている。	/	/	/	介護計画の作成や更新時には、事前に利用者や家族から意見を聞くほか、必要に応じて、医師から指示やアドバイスをもらっている。把握した情報をもとに職員間で話し合い、計画作成担当者を中心に介護計画を作成している。また、利用者や家族から出された意見のほか、職員のアイデアや工夫などを計画に反映させている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	必要に応じて本人や家族からの聞き取りを行い、出たアイデアは実施し次回のサービス担当者会議等で結果を検討する。	○	/	○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度化する前の生活と本人の体調を考慮した上で出来るだけ変わらない生活を送れるよう努めている(居場所や接する人など)。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	一部できているが十分とは言えない。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	介護計画は一つのファイルにまとめて確認できるようにしている。			◎	介護計画はファイルに綴じられ、職員はいつでも計画やサービス内容を確認できるようにしている。介護記録は、日々の利用者の生活状況を記載するほか、介護計画に沿ったサービス内容は#の印を付けて記録を残すことで、計画に沿った支援の実施に努め、他の職員等が見ても、実施状況を確認しやすくしている。また、職員は日々の生活記録の記載漏れなどが無いよう努めている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	ケアプランの実施状況は介護記録に記載し第7表に転載した上で確認しながら支援につなげている。			◎	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じで見直しを行っている。	◎	毎月モニタリングを行い、3か月に一度見直しを行っている。			◎	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、月1回モニタリングを実施するとともに、状態の変化が見られない利用者にも、必ず現状確認をすることができている。訪問調査日には、利用者の状態を丁寧に記録したモニタリング記録を確認することができた。さらに、入退院などの大きな変化が見られた場合には、医師に相談するほか、家族の意向を聞いて職員間で話し合い、現状に即した新たな計画の作成をしている。一部ICT化が図られ、介護計画の過去の変更履歴など、いつでも確認できるように保存されている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	毎月のモニタリングにて確認している。			◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	大きな変化が見られた場合や、入退院等があった場合はその都度見なおすようにしている。			◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的なミーティングの他に、必要に応じて複数名の職員で当面の課題について話す機会を設けている。			◎	月1回、ミーティングを開催し、利用者の現状確認や課題などの話し合いをするほか、必要に応じて、随時カンファレンスを開催し、利用者一人ひとりの課題解決や情報共有に努めている。また、事業所では技能実習生の受け入れに協力しており、コミュニケーションや情報共有への意識が高く、職員間で話し合う機会も多い。ミーティングには、少しでも多くの職員が参加できるように、事前に日程調整をするとともに、参加できない職員には、会議録を閲覧してもらうほか、口頭で内容を伝達し、正確な情報共有に努めている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	限られた時間ではあるが参加した職員全員の意見が聞けるよう心掛けている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	○	開催時間については、職員の意見を聞きながら14時～16時の間で設定している。勤務以外の職員にも呼び掛けて参加を促している。			○	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	基本的には申し送りノートを活用しているが、勤務の引継ぎ時に直接口頭での申し送りの時間を確保して介護記録を基に情報伝達を行っている。	◎		○	朝夕の申し送りの際には、申し送りノートを活用し、職員間で口頭で情報共有をしている。出勤時に、職員は申し送りノートを確認し、申し送りの後で従事することができている。事業所では、申し送りノートの確認のサインなどは行われていないが、ただ単に押印やサインを促すこともなく、管理者は、「現在の方法で問題なく、情報伝達ができている」と考えている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	本人からの要望や能力的に可能であれば、可能な限り叶えられるよう本人と職員で話しあっている。				日々の生活の中で、職員は可能な限り、利用者に複数の選択肢を提示し、自己決定してもらえるよう配慮している。入浴や排泄の際にも、職員は声をかけ、利用者の希望を確認した支援に努めている。また、職員は利用者の性格等を把握し、一人ひとりに合わせた話題を提供したり、意識して声かけをしたりするなど、生き生きとした言動や表情を引き出せるような支援に努めている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	複数提案したり一緒に考えたりして、出来るだけ本人が選べる状況を作るようにしている。			○	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのベースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	他利用者に大きな影響のない範囲で、まずは本人にどうしたいか聞くようにしている。				
		d	利用者の生き生きとした言動や表情(喜び・楽しみ・うろたえ等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	出来るだけ利用者同士がスムーズに生活が出来るような関係になるよう努めている。			○	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	表情や仕草に加えてわかる範囲でのその人の過去の暮らし方も踏まえて判断するようにしている。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	法人内外の研修にて学ぶ機会を設けている。日々の業務において、職員間で意識換気しあう場面もある。	○	-	◎	法人・事業所として、年間研修計画を作成し、計画に沿って利用者の尊厳やプライバシー保護などを学び、全ての職員は意識した対応に努めている。訪問調査日には、研修内容等を記載した研修実施記録を確認することができた。また、居室をプライバシーのある空間と認識し、入室の際に、職員はノックのほか、事前に利用者へ声かけをしてから入室をしている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	周囲に他人がいるということを考慮した声掛け・誘導を行っている。				
		c	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	ノックや声掛けをして返事があってから入室するよう努めている。			○	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	法人内外の研修にて学ぶ機会を設け理解するよう努めている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	感謝の言葉は利用者と職員、あるいは利用者同士において日常的に聞かれおり、互いに助け合える関係になっている。	/	/	/	職員は、利用者同士の関係性を把握し、配席などを考慮している。言い合いなどのトラブルが発生しそうな場合には、早期に間に入り、利用者双方の意見を聞くなどの対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	理解している。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者間のトラブルは比較的時折見られ、職員は利用者同士の関係性や相性を把握した上適宜間に入り、大きなトラブルにならないよう動いている。	/	/	○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルがあれば間に入り、過度のストレスや遺恨が生じないように努めている。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入居時に本人や家族から情報を得るようにしているが入居後にも改めて確認し把握するよう努めている。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	コロナ禍で事業所への来所を控えてもらう必要があったが、法人内の別事業所の面会スペースを借りて面会を行った。コロナウィルスが5類移行後は短時間の面会は可能となり実施している。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出たて過ごすことも含む)	△	基本的に来所される際に時間の制限は設けていないが(先方の事情によっては、夜間だからと言って断ることもない。)外出についてはコロナ禍のため事業所側から働きかけることは出来なかった。	○	－	△	コロナ禍が続き、外出制限が設けられていたため、積極的な外出支援はできていない。天気が良い日には、玄関先に出て外気浴をしたり、母体のクリニックにリハビリに出かけたりするなど、少しでも利用者が気分転換を図れるように支援している。法人・事業所として、運動会の開催を予定するなど、感染状況を見計らいながら、徐々に外出等のできる機会が増えていくことを期待したい。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	△	コロナ禍のため実施していなかったが5類移行後は病院受診等の理由で外出することは有る。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	法人内外の研修で学び理解する機会を設けており、周辺症状が生じる要因については、それぞれのケースについて必要に応じて職員同士や法人と相談しながら対応している。	/	/	/	職員は、利用者一人ひとりの生活動作を確認し、廊下の歩行やテレビ体操、ペダル漕ぎなどが行われている。希望する利用者には、母体クリニックで実施しているマシントレーニングを中心としたパワーリハビリに参加してもらうなど、利用者の心身機能の維持や向上に向けて取り組んでいる。また、利用者のできることは自分でしてもらい、職員は見守りや待つ介護に努めている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	生活リハビリを積極的に取り入れ、日常の中で楽しみながら維持向上できるよう努めている。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	本人が出来ることはできるだけ本人に行ってもらうようにしている。環境整備も含めて、できるようになる可能性についても考えるようにしている。	◎	/	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	把握に努めており、それぞれの力を発揮できる役割を出来るだけ見つけて継続できるように支援している。	/	/	/	洗濯物のハンガー掛けや取り入れ、行事で使用する道具の製作、清掃、テーブル拭き、縫い物など、職員は利用者一人ひとりの得意なことや楽しみのある役割や出番として担ってもらい、笑顔で過ごせるように取り組んでいる。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	結果ではなく課程を重視して、役割や出番を作るように努めている。	◎	－	○	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	本人らしい服装や持ち物の選択は本人の個性と理解した上で支援している。				整容の乱れや汚れが見られた場合には、利用者の自尊心を傷つけないように、職員は声をかけ、さりげなくサポートをしている。重度の利用者にも、居室のみで過ごしてもらうことなく、基本的に日中には着替えてもらい、共用スペースで過ごしてもらえるよう支援している。中には、居室で見られない言動が共用スペースで見られることもあり、必要に応じて記録に残し、介護計画の内容に反映させている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	本人からの要望がない場合でも家族等に意見を聞きながら行っている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	選べる方には選んでいただいている。重度の方でも、これまでの好みのスタイルが継続できるように過去の生活を振り返りながら支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	季節や行事に合わせて選べるようにしている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくなりカパーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	あからさまにならないようにさりげなく整えられるように気を付けている。	◎	－	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	本人や家族の希望があれば家族の同行で行きたい店に行くことは可能。普段は理容師に来てもらっている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	清潔感が感じられるように努めている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	共有スペースからすぐ眺められる位置に台所がある環境下で、食事作りに少しでも利用者が関わられるよう意識している。				1週間交代で、職員が栄養バランスに配慮した献立を作成し、食材の買い出しにかけ、利用者に調理の下ごしらえや後片づけを手伝ってもらいながら、職員と一緒に調理をしている。各ユニットの献立は基本同じにしているが、利用者一人ひとりのアレルギーや嫌いな物、好みや食べたいメニューを把握するほか、メニューをアレンジするなどの対応もしている。2階ユニットでは、食べたいメニューをいう利用者も多く、一緒に献立を考えて、調理を行うことも多い。食器類は、事業所で用意した物を基本として使用しているが、希望する利用者には、馴染みの物を持ち込み、使用することもできる。食事の際に、利用者と同じ食事を希望して食べることができるが、職員は見守りやサポートに専念し、別々に食事を摂るようになっていく。重度の利用者も共用スペースで過ごすことが多いため、調理の音や匂いを感じる事ができている。また、栄養士のアドバイスをもらうまではできていないが、医師から減塩などのアドバイスをもらったり、職員間で同じメニューが重ならないように話し合ったりすることもできている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	下ごしらえ、洗いや、食器片づけなど、場面場面でそれぞれの利用者が役割をになっている。			◎	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	同上				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入居時の情報や聞き取りで把握しているが、苦手なものでも食べていただける工夫をしている。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	食材費が高騰しているなかで、安い野菜イコール旬の野菜ということで、季節感は割とあると思われる。メニューには利用者の希望を取り入れるように努めている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	利用者の状態に合わせた食事作りを心掛けている。本人の状態からやむを得ずミキサー食や刻み食に変更する場合には、検討期間を設けて試しながら、本当に本人の食事状態に適しているのかを職員間で話し合ってから変更するようにしている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	要望がある方には本人のなじみの食器を使ってもらっている。			◎	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	職員が利用者と同じものを食べるかどうかは職員自身に任せているが、現状同じ食事を取っている職員は1名で他の職員は検査のみ。同じ時間に食べる事は難しい為食事介助や様子観察、サポートは適宜している。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	これから作る食事の内容を事前に伝えたり、下ごしらえを一緒に行いながら何に入れるのかなどの会話をしている。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	栄養やカロリー計算まではしていないが、食事作りの担当が都度変わることで、過度に偏ることのない食事になっている。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	味を変えたりとろみをつけて飲みやすくするなど、出来るだけ無理なく摂取してもらえるよう工夫している。一度に必要な量が摂れない方は場合は、時間をかけて複数回に分けて無理なく摂取してもらうように努めている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	メニュー作りは職員が持ち回りで行っており、同じようなメニューが続かないように心掛けて作成するようにしているが、栄養士等のアドバイスは受けていない。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	消毒等の衛生管理は業務の中に組み込んで、日常的に行っている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	理解して行っている。	/	/	/	食後に職員は声をかけ、共用スペースの洗面台を中心として、歯磨きなどの口腔ケアを実施している。中には、居室にある洗面台で口腔ケアを行う利用者もいるが、職員は口腔ケア時のほか、服薬介助の時を利用して、全ての利用者の口腔内の状況の把握に努めている。また、職員は見守りをしたり、スポンジブラシなどの口腔ケア用品を使用した支援をしたりするなど、利用者の状態に応じた対応をしている。さらに、異常が見られた場合には、家族に歯科医の受診のお願いをしている。歯科医などから直接指導を受ける機会は少ないが、職員は外部研修へ参加するなど、口腔ケアの重要性を学ぶことができています。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	概ね把握している。	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	専門家から直接情報を得ているわけではないが外部研修などで口腔ケアに関して学んでいる。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	夜間の洗浄・消毒等、利用者の義歯の清潔を保てるよう支援している。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	歯磨きの声掛けに加えて、歯ブラシや口腔スポンジ等を活用して、口腔衛生に関する支援を行っている。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	自分で行けない方には適宜誘導・介助をするなどしている。おむつやパッド類の使用についても使用の是非については慎重に話し合い、やむを得ず使用する場合は家族にも相談するようにしている。	/	/	/	事業所では、なるべくおむつに頼らず、利用者がトイレで排泄でき、おむつ外しができることを目標とした支援に努めている。朝夕の申し送り時のほか、毎月のミーティングを活用して、利用者の排泄状態などを踏まえて、職員間で適切なパッドや履くパンツなどの排泄用品の使用などの話し合いをしている。中には、排泄状況を考慮して、夜間のみおむつを使用している利用者もいる。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	身体的な要因をはじめ、生活習慣(運動不足)、ストレス等の様々な要因を考えながら便秘解消に努めている。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	排泄・水分チェック表に都度記録を残すことで、ある程度のパターンを把握している。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	基本的にはおむつ等を使用しなくて済む方法を考えるようにしており、その方法が本人にとってどうかという考え方でおむつ使用の是非について検討するようにしている。本人と相談する場合もある。	◎	/	○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	トイレ誘導のタイミングや介助方法などについて職員間で話し合っており取り組んでいる。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	排泄・水分チェック表を適宜確認しながら声掛けや誘導のタイミングを図っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	おむつ等を使用する場合には、使用の理由やタイミング(日中と夜間の状態の区別等)について家族に説明し同意を得ている。精神疾患によりADLの短期・中期的な変化がある利用者などは、本人の状態によっておむつ類の使い方を都度変更している。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	○	利用者一人一人の状態に合わせて使い分けしている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	適度な運動を促したり、牛乳や食物繊維の摂取を進めるなどしている。便秘時は腹部の温めやマッサージをしている。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	○	基本的には事業所の事情の範囲内になる事もあるが、その中でも出来るだけ利用者の選択ができるよう努めている。「今なら、これができます。後なら、これが出来ますけど、どうされますか？」等。	◎	/	○	週3回、利用者は午前中の時間帯に入浴をすることができる。中には、入浴を拒む利用者もいるが、無理強いすることなく、職員を変えて声かけをするなど、気持ち良く入浴してもらえるような工夫をしている。また、利用者には自分でできる部分の洗身をしてもらい、職員はできない部分のサポートをしている。さらに、入浴前にはバイタルを確認するとともに、一人ひとりの入浴状況を記録に残すことができています。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	○	利用者が入浴に何を求めているのかは、一人一人に合わせて考えながら入浴支援をしている。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	出来るところは自分でしてもらうように声掛けしながら、浴室内の危険性を理解したうえで必要に応じて介助している。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	声のかけ方や、声を掛ける職員を変えてみたり、タイミングを変えるなどしている。羞恥心の問題や恐怖心等、要因についてもどうすれば緩和できるかを考えながら行っている。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	本人の様子や普段との違い、直近のバイタルチェック表等を参考にしながら入浴の可否を決めている。入浴後は休める環境を整え、湯冷めや脱水、血圧変動等にも配慮している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	24時間シートにて睡眠の状況を把握するとともに、夜間の様子については申し送りにて情報共有している。				24時間生活変化シートに記録を残し、職員は利用者一人ひとりの睡眠状況を把握している。中には、眠れないことが続くため、健康面を考えて、医師に相談して眠剤を服用する利用者もいる。また、できる限り日中に起きて過ごしてもらい、外気浴を取り入れるほか、体操やレクリエーションの活動量を増やすなど、職員は安易に服薬に頼らず、夜間に利用者が安眠できるような支援に努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	出来るだけ日中の活動を促すことで、夜間の睡眠の質を高めるよう努めている。				
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	日中の過ごし方が睡眠に及ぼす影響をまず考えたうえで、必要に応じて医療の力も借りる方向で検討するよう心掛けている。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組みんでいる。	◎	自分で動けない方は、適宜居室やソファでくつろげる環境を持てるよう支援している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	電話をかけたという利用者には、掛けられるよう支援している。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	◎	同上				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	同上				
		d	届いた手紙や葉書をそのまませず音信がとれるように工夫している。	○	本人に渡して伝えるようにしている。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	家族への協力を依頼して、協力してもらっているケースもある。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	概ね理解している。				
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	コロナ禍のため実施していない。				
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」など一方向的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	利用者がお金を所持する場合は、ご家族に利用者が自分でお金を所持する場合のリスク(紛失の可能性・紛失したと勘違いする可能性・思い込みにより盗られたと思う可能性など)を説明したうえで所持してもらうようにしている。				
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	預り金の使用については都度家族に使用の目的を説明し、同意を得ている。				
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	預かり金規程を設け、同意を得ている。 金銭の使用があれば、その都度出納帳をつけ、本人やご家族の求めがあればいつでも見てもらえるようにしている。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	協力医療機関のPTにリハビリに關しての相談をしている。	◎		○	コロナ禍が続き、外出や面会などの制限が設けられ、法人の方針もあり、外出に係る個別ニーズへの対応は十分にできていない。利用者一人ひとりの身体機能を維持するため、母体クリニックの理学療法士からリハビリの助言をもらうなど、可能な範囲で既存サービスに捉われない支援の提供にも努めている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	玄関先や階段には花を置いて入りやすい雰囲気を作っている。特に建物に入る際の制限は設けておらず、誰でも自由に訪ねることが出来るようになっている。	◎	—	○	事業所の敷地内には、玉ねぎや大根などの野菜を栽培している菜園があるほか、玄関先には、職員と利用者が一緒に花を育てるなど、家庭的な雰囲気が感じられる。また、玄関にはスロープも設置され、明るく来訪しやすい雰囲気づくりをしている。

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそくような設えになっていないか等。)	○	殺風景な雰囲気にならないよう、ソファ等の配置は気を付けている。車いす利用者が多い為移動できるスペースを十分確保している。	◎	—	○	共用スペースは、職員が毎日共用スペースの清掃を行うほか、整理整頓や換気が行き届き、快適な空間となっている。利用者の動線を確保するために、極力廊下などには物を置かないほか、家具の配置などの配慮をしている。また、共有スペースにはキッチンが設置され、生活の中で調理の様子を感じられるほか、窓から中庭の木々や野菜の生育状況などの様子が眺められ、利用者の五感に働きかけられている。今後は、壁面に季節を感じられる掲示を行うなどの装飾に配慮し、より家庭的で温かみのある工夫が行われることを期待したい。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	毎日、掃除している。	/	/	◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	台所が共有スペースに向けて開放してある作りのため、調理の様子や匂いを感じながら過ごすことが出来る。 廊下の窓から中庭が見える場所があり、廊下を歩きながら中庭で育てている野菜の育成について会話したりしている。	/	/	○	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	共有スペースを中心に東西に利用者の居室が配置されており、居室にいながらも人の気配を感じられる作りになっている。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	使い慣れたものは自由に持ち込んでいただいている。 衣類の衣替え等は可能な限りご家族にお願いして、本人とご家族で相談しながら行ってもらっている。	◎	/	○	居室には、ベッドや洗面台、エアコン、押し入れを設置している。利用者の希望に応じて、馴染みの物を持ち込むこともでき、テレビや健康器具、仏壇、趣味に関わる書籍などを持ち込む利用者もあり、好みを反映された居心地の良い空間づくりをしている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	利用者の導線を意識しながら、不要な障害物がないように配慮しつつ、ある程度の「狭さ」も確保して、歩行時の安心感やふらつき時に自分で支えることができるような環境づくりを心掛けている。	/	/	○	利用者が認識しやすいように、事業所内のトイレや居室などのドアの色分けを行うなどの工夫をしている。また、廊下などには不要な物は置かず、車いすの利用者もゆったりと移動できるような動線が確保されている。さらに、共有スペースには、ぬり絵の用具や本など、利用者の手の届くところに物を置いている。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき・裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	特別の危険があるもの以外は、ある程度手の届くところに置いている。裁縫道具など危険を伴うものは手の届かないところで管理しているが、求めがあればすぐにお渡しできるようにしている。	/	/	/	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	◎	職員は、日中施錠していないことが当たり前の状態で利用者の生活を見守っている。外に出ようとする利用者がいた場合でも、あわてて止めるのではなく、さりげなく外に出る目的を聞いたり、そうなるに至るまでの本人の思いを探る努力をしている。	◎	—	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を理解している。日中に玄関は開放され、夜間のみ防犯のために施錠をしている。また、ユニットの入り口には、センサーが設置され、職員は利用者や来訪者などの出入りの状況を把握しやすく、余裕をもって対応することができる。さらに、帰宅願望のある利用者には、職員が寄り添い、気分が変わるような話題提供をするなどの工夫をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	日中の施錠をしないことについては家族に説明し理解を得ている。ご家族が施錠を望むケースは今のところないが、もしあれば話し合いの中で理解を得られるよう努める。	/	/	/	
(4) 健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	利用者ごとのファイルに病歴や現病をまとめてあり、把握できるようにしている。	/	/	/	
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	普段との違いがあれば記録に残すとともに、その場にはないスタッフでも把握できるように申し送りをするよう努めている。	/	/	/	
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重症化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	協力医療機関とは毎日利用者の心身の状況についてのやり取りをしており、随時相談に乗ってもらえる環境になっており、重症化防止や適切な入院支援の体制が出来ている	/	/	/	
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	専門の病院等、必要に応じて本人やご家族が希望する医療機関や医師に受診できるようにしている。	◎	/	/	
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	必要な情報の提供を行いながら、適切な医療が受けられるよう努めている。	/	/	/	
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	受診前後にはご家族に連絡をするようにしており、必要に応じて本人やご家族の合意を得るようにしている。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	グループホームでの本人の様子や入院中に予想される事象、食事・入浴・排せつ・ADL等の基本情報など、可能な限り提供するようにしている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	入院期間中も、医療機関やご家族と本人の状況についてやり取りを重ねている。早期退院についても受け入れの状況を説明しながら、都度話し合う機会を設けている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	協力医療機関とは、毎日利用者の心身の状態や変化についてのやりとりをしている。協力医療機関の医師も看護師も利用者の状況を把握してくれており、日常的に相談ができるような環境になっている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	急な発熱やその他急変時においても、24時間相談し、指示を仰げる体制になっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	日々の状態の変化は記録に残し、訪問看護や、定期的な通院、日々の医療機関とのやり取りにより医療職に情報を提供することで早期発見・治療につなげられている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	利用者が使用する薬の説明書は、利用者の個人ファイルに分かるように閉じ、すぐ確認できるようにしている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	名前、日付、朝・昼・夜・眠前等を確認した上で直接本人に手渡しし服薬してもらっている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	利用者の普段の様子を把握することに努め、状態の変化に注意して観察している。24時間シートによる具体的な様子および排泄・水分チェック表、体重表等による数字での把握など。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	重度化した場合の指針を作成しており、入居時には説明して意向の確認を取っている。				事業所では、「看取りに関する指針」を整備し、入居時に家族等に看取り支援が可能なことを伝え、同意を得ている。近年、看取り支援の実績はないが、医療法人ということもあり、日頃から医師等との連携が図られるなど、重度化や終末期への支援体制が整っている。重度化した場合には、医師や看護師から指示を仰ぐとともに、家族を交えて関係者で話し合い、方針を共有している。また、利用者の状態は、1日3回母体クリニックに連絡を入れて情報共有を図るとともに、急変時にも迅速な対応にも役立っている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	かかりつけ医の医師や看護師にも指示や意見を仰ぎながら方針を立てている。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	適宜助言をしながら行うよう努めている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	できること・できないことについては説明をして理解を得るようにしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	対応についての方針や、生活の変化に伴う新たな課題などについて家族と話し合っている。かかりつけ医とも、日々の状態について毎日報告しながら、本人の状態についての相談ができる体制になっている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	重度化や看取りの場面においては特に家族との連絡を密にし、ご家族の心情を理解するよう努めている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	研修にて定期的に学ぶ機会を設けている。新型コロナウイルスについても、協力医療機関から最新情報を入手するなどして把握するよう努めている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	感染症対策に関する研修を実施している。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	○	協力医療機関から最新情報を入手するなどして把握するよう努めている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	職員は標準予防策の徹底をしており、来訪者に対しても玄関先での手指消毒や検温、マスクの徹底とソーシャルディスタンスの確保をお願いしている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	◎	来所持や電話連絡の際には利用者の生活状況を伝えながら、意見を求めるようにしている。				コロナ禍以前は、家族に参加を呼びかけて、事業所の行事などに参加協力をしてもらうことができていたが、コロナ禍が続き、現在は感染対策のために、家族が参加できる行事の開催は自粛をしている。管理者は、「感染状況を確認しながら、徐々に家族との交流を再開させたい」などと考えている。家族等との面会は、マスクをしたままで、少し間を開けて対応をしている。また、家族には介護計画のモニタリングの後に、電話連絡を活用して利用者の状況を伝えるほか、来訪時に日々の様子を詳しく伝えるなど、家族との関係性が途切れないような工夫をしている。利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの異動を含めた出来事などが十分に家族に伝わっていないことが窺えるため、担当職員の退職や交代を家族に報告したり、運営推進会議を活用して、事業所の出来事を報告したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	△	コロナ禍のため大幅に制限されていたが、5類移行後は外出については事前に申請の上で実施している。	◎		△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	来所持や電話連絡時に出来るだけ詳細に伝えるようにしている。	◎		○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	「本人の望む姿」と「家族が望む本人の姿」にはギャップがあることを伝え、落としどころを探るように努めている。				
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	×	現状、出来ていない。	×		×	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	自由とリスクの関係については入居時および必要に応じて家族に説明するようにしている。				
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	コロナ禍でも出来るだけ本人を交えて近況を報告し、要望や意見が聞けるようにしている。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時には具体的な説明を心掛けている。内容の変更等があれば説明し、書面にて同意を得るようにしている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	しっかりと話しあうよう努めている。				
Ⅲ.地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	×	実施できていない。			—	コロナ禍が続き、外気浴の際に、近隣住民へ挨拶や会話を交わす程度に留まっている。以前は、歌などのボランティアを受け入れたり、中学生の職場体験に協力したり、利用者と一緒に地域行事に参加するなど、交流を図ることもできていた。コロナ禍の収束後には、感染状況を見計らって、地域住民との交流が徐々に再開されることを期待したい。また、外部評価の地域アンケートに協力してもらうことができていないため、コロナ禍の収束後には、運営推進会議の参加メンバーに協力を呼びかけるなど、出された意見をサービスの質の向上に反映されることを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	ゴミ捨てや出退勤時に、すれ違う地域の方には挨拶をするよう心掛けている。			—	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	増えていない。				
		d	地域の人々が気軽に立ち寄りたし遊びに来たりしている。	×	ほとんどない。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	×	回覧板を持ってきた方とあいさつをする程度で、遊びに来るところまではいっていないのが現状。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	歌会の実施などをボランティアにお願いしていたが、コロナ禍のため中止している。ボランティアの方に庭木の剪定をしてもらっている。				
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー、コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	×	古川は人口も多く、近所にはスーパーや学校、公民館も近くあり、地域資源は豊富にあると思うが利用者の力の発揮や豊かな暮らしを楽しむことには十分つなげられていない。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	×	コロナ禍のため、職員のみで開催していたが、今後は少しずつ以前の状態に戻すよう取り組む予定。	○	/	△	コロナ禍が続き、運営推進会議は職員のみでの開催となっている。家族等へ議事録の送付は行っておらず、来所時に確認してもらうに留まっている。コロナ禍の収束後には、全ての家族に会議の参加案内を送付したり、会議の終了後には、会議に参加できなかった家族や参加メンバーに議事録を送付したりするなど、より多くの参画を得ながら、有意義な会議となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	サービス評価実施後は、報告するようにしている。	/	－	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	コロナ禍のため、職員のみで開催していたが、今後は少しずつ以前の状態に戻すよう取り組む予定。	/	－	/	
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	事業所理念は事業所内に見える場所に掲示して皆で共有し、日々のケアにあたるうえでできるよう努めている	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	利用者や家族には契約時に、地域には運営推進会議で伝えているが、伝わっているかはわからない。	○	－	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	◎	ミーティングや内部研修により、職員のスキルアップが図れる体制づくりに取り組んでいる。	/	/	/	医師である代表者は、事業所に往診等で来訪があり、利用者や職員から意見を聞くこともある。法人として、年間研修計画を作成するほか、計画に沿った内部研修等を職員は受講することができ、働きがいやスキルアップに繋がっている。また、日頃から管理者は、職員とのコミュニケーションを大切にして、支援方法などを職員と話し合いをするともに、職員間の情報共有に力を入れることで、働きやすい雰囲気づくりに努め、職員同士の良好な関係に繋がっている。さらに、職員は管理者と話しやすく、気軽に相談することができる。加えて、シフト作成の際に、希望休などの要望を聞くほか、希望がない場合にも管理者等は職員と相談して、有給休暇等の取得を促すなど、働きやすい職場環境づくりに努めている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	管理者は他の職員とともにケアにあたりながら職員の働き方を見たり仕事上の課題について相談を受けるなどしながら、日常的にOJTを実施している。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	◎	処遇改善加算、特定処遇改善加算、ベースアップ加算を取得できる体制をつくり、年2回の個人評価等に基づいて各職員の目標や努力実績を評価している。有給休暇取得の促進も行い、職場環境の整備改善に努めている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	地域密着型サービス協会に加入している。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	有給休暇の取得等に積極的に取り組んでいる。	◎	－	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	◎	内部研修や事業所ミーティングにて定期的に学ぶ機会を持ち、理解するよう努めている。 虐待・身体拘束防止対策委員会にて毎月話し合う場を設けている。	/	/	◎	事業所には、虐待防止に関する委員会が設置され、定期的に虐待や不適切な言動の防止などの研修を実施するほか、職員間で話し合いをしている。訪問調査日には、委員会議事録や研修実施報告等から、事業所の虐待防止への取り組み状況を確認することができた。また、不適切な言動が見られた場合には、管理者等に報告するとともに、該当職員に確認し、指導や注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	日常的な申し送りや、事業所内ミーティングにて話し合う機会を設けている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	事故等が続いた場合は、職員全体で振り返る機会を持つよう促し、または実施し、影響がないかを都度確認している。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	内部研修にて定期的に学ぶ機会を設けるとともに、虐待・身体拘束防止対策委員会に振り返り法人全体で振り返るよう努めている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	虐待・身体拘束防止対策委員会にて定期的に法人内の各事業所がケースを持ち寄り、検討するようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	○	現状、要望はないが、必要があれば話し合いを行い理解を求める。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	○	研修等で学ぶ機会を設けている。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	△	既に後見制度を利用している利用者の司法書士と、定期的により取りをしている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	急変時対応マニュアルを作成し、周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	ミーティングやそれぞれの職員の過去の経験などを話し合い事例に応じた応急処置や初期対応を学べるようにしている				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	事故やヒヤリハットは、発生を確認したら報告書を作成し、話し合いを行い対策を考えている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	事業所内のミーティングや現場の職員による話し合いにて行っている。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	◎	苦情があれば個別に対応した上で管理者・法人に報告し、さらなる対応を行って問題の解消に努めている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	◎	速やかに対応し、解決するよう努めている。必要があれば市町にも報告・相談を行う。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過と結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	◎	苦情があれば傾聴し、対応策について説明して話し合い、結果や経過を報告するようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	◎	苦情相談窓口を重要事項説明書に記載し、入居時に説明して。	◎		◎	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞き、可能な範囲で対応をしている。また、入居時に苦情受付窓口を利用者や家族等に説明するほか、来訪時や電話連絡時等を活用して、職員は家族から意見や要望を聞くように努めている。事業所の各ユニットには、苦情箱が設置され、定期的に確認しているが、ほとんど意見や苦情などが入ることはない。さらに、管理者は職員とのコミュニケーションを大切に、日頃から意見や提案などを聞き取るよう努めている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	◎	契約時には相談窓口について説明している。 意見箱を玄関先に設置し、いつでも要望等を受け付けるようにしている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	◎	日常的に職員と接し、話が出来る機会が設けられている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	日常的に話ができる機会があり、提案等を受けている。			◎	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	理解するよう努めているが、職員全員での取り組みは出来ていない。				外部評価の結果や目標達成計画は、運営推進会議の中で、参加メンバーに報告するとともに、事業所内に掲示して周知をしている。また、ミーティング等を活用して、評価結果を職員に周知するとともに、目標達成計画を作成し、達成に向けて取り組んでいるが、全ての職員で自己評価を作成するまでには至っていない。コロナ禍の収束後には、家族や会議の参加メンバーに呼びかけて、目標達成の取り組み状況などのモニターの協力をしてもらったり、サービスの評価結果や目標達成への取り組みの意見交換をしたりするなど、出された意見等をサービスの向上に繋げられることを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	評価により出た課題を意識して今後の行動につなげるよう努めている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	外部評価結果と目標達成計画は事業所の玄関に置き、いつでも閲覧できる状態にしている。 取り組みのモニターはしてもらっていない。	○	－	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	目標達成計画を事業所内に掲示して都度確認できるようにしている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	◎	災害時対応マニュアルを作成し、周知している。	/	/	/	事業所として、災害対応マニュアルを作成し、職員に周知している。定期的に、避難訓練を実施しているが、コロナ禍が続いていたこともあり、関係機関と連携した災害対策を行うことができていない。ハザードマップの対象地域で、事業所として、避難確保計画を作成しているが、事業継続計画(BCP)までは策定できておらず、今後実効性のある計画策定を予定している。法人内の各事業所と連携を図るほか、地域の自主防災組織と繋がりを深めるなど、関係機関との連携に向けたさらなる取り組みが行われることを期待したい。コロナ禍が続き、事業所への家族の来訪が少なかったこともあり、利用者家族等アンケート結果から、災害への備えに対して十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、避難訓練の様子の写真を事業所内に掲示したり、家族や地域住民、運営推進会議の参加メンバーに避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族等への安心安全な取り組みが理解してもらえるように、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	定期的に訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	定期訓練時に行っている。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	×	コロナ禍のため、実施していない。	×	－	△	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	コロナ禍のため、実施していない。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	例年は地域フォーラムを開催して行っているが、コロナ禍のため現在は実施していない。	/	/	/	同一の法人内に、地域の高齢者やその家族等への相談支援を行う事業所があり、相談対応は当該事業所に対応している。直接、事業所に入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。コロナ禍において、市行政や地域包括支援センターが主催する会議や研修に参加する機会は減少しており、会議や研修に参加する機会は減っているが、法人内の他のグループホームのほか、関係機関との連携に努めている。法人と協力して、地域住民を対象に、以前は「地域フォーラム」を開催することができていたが、コロナ禍が続いていたため、現在は開催が自粛されていることもあり、コロナ禍の収束後には、地域フォーラムの開催を再開したり、地域包括支援センター等と一緒に、地域活動を協力したりすることを期待したい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	相談があれば受け付けるようにしている。	/	－	○	
		c	地域の人が集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	今のところ、特に活用はされていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	外国人技能実習制度を利用して外国人実習生の受け入れを行っている。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	×	特別なことは行っていない。	/	/	○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和5年9月7日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 8名	(依頼数) 8名
地域アンケート回答数	0名	

※事業所記入

事業所番号	3870102088
事業所名	グループホームつばきの家
(ユニット名)	2階
記入者(管理者)	
氏名	藤岡 和仁
自己評価作成日	令和5年8月5日

(別表第1の2)

【事業所理念】 医療と介護の連携により利用者が安心して生活できるよう支援する。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 取り組んだこと： ミーティングにて外部評価項目をピックアップして話し合い、グループホームにとって求められることや自分たちが行っているケアの意義について学ぶ機会を持った。 その結果： 職員が生活リハビリの大切さを再確認し、生活リハビリの提供を促す機会が増えたことで、一部の利用者ではあるが家事活動への参加が増えた。	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 松山市内南部の住宅街にある事業所は、周辺に大きな幹線道路があるほか、買い物や飲食などの利便性も良く、生活を送りやすい場所に立地している。事業所周辺には多くの店舗が立ち並び、生活を送る上で利便性の良い半面で、急速に田畑が住宅地に変わってきている。また、母体は医療法人であるため、事業所内に看護師が配置されているほか、24時間体制で医療連携体制が図られ、医師や看護師から必要に応じて助言が受けられることもあり、利用者や家族、職員には安心感がある。コロナ禍が続き、外出や面会制限を設けられていたが、5類移行後には制限が緩和され、感染対策を行った上で、徐々に地域や家族との交流を再開している。定期的に、管理者は職員との個別面談を実施して意向等の把握に努めるほか、日常的に職員からの相談にも応じ、メンタルヘルスの対策を行うとともに、有給休暇や希望休暇の取得を促進するなど、働きやすい職場環境づくりに努めている。
--	---	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	◎	本人に確認している。	◎	/	○	入居の契約時のほか、入居後に初期の段階で、管理者等は利用者や家族から思いや意向などを聞き、把握に努めている。また、日々の生活の中で、職員は表情やしぐさ、行動などを観察しながら、思いをくみ取るよう努めている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	◎	現在の表情や仕草に加えて、過去の言動や趣味嗜好の情報から考えている。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	◎	家族の来所持や近況報告の際には、本人の言葉を伝えながら話すよう努めている。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	本人の思いが感じ取れる言葉や行動は生活記録に残し、気づき等も記入した上で、必要に応じて職員間の申し送り等で共有している。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	定期的に複数の職員で意見交換をする機会を持ち、本人にとってどうかという話題で話すようにしている。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入居契約時に本人、家族に聞き取りをしている。入居後も関係づくりを兼ねて本人には聞き取りを続けるようにしている。	/	/	△	初回のアセスメント時に、利用者や家族から情報を聞くほか、友人や関係者から情報を得ている。把握した情報は、センター方式のアセスメントシートに記載し、職員間で情報を共有している。また、日々の生活の中で、新たに把握した情報は、個別記録のほか、申し送り等での情報共有に留まり、訪問調査日にはアセスメントシートへの追記や更新を確認することができなかった。今後は、介護計画の変更時など、アセスメントシートの情報が随時更新され、職員間で共有が図られることを期待したい。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	◎	アセスメントにて把握するよう努めている。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に務めている。(生活環境・職員のかかわり等)	◎	センター方式の24時間シートに記録した上で、申し送り等にて全職員が把握するよう努めている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント (※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	◎	適宜職員間で話し合いを行い、必要に応じて事業所ミーティングで検討するようにしている。	/	/	○	月1回、実施するミーティングの中で、気づきやアイデアを出し合いながら、職員間でより良いサービス提供の検討などを話し合い、介護支援専門員が意見の取りまとめをしている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	◎	明確な課題と思われるものを抽出し、ケアプランに反映し、サービスを提供するよう努めている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	◎	画一的にならないよう内容となるよう努めている。	/	/	/	介護計画の作成や更新時には、事前に利用者や家族から意見を聞くほか、必要に応じて、医師から指示やアドバイスをもらっている。把握した情報をもとに職員間で話し合い、計画作成担当者を中心に介護計画を作成している。また、利用者や家族から出された意見のほか、職員のアイデアや工夫などを計画に反映させている。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	必要に応じて本人や家族からの聞き取りを行い、出たアイデアは実施するよう努めている。	○	/	○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度化する前の生活と出来るだけ変わらない生活を送れるよう努めている(居場所や接する人など)。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	一部できている。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	介護計画は一つのファイルにまとめて確認できるようにしている。さらにサービス内容をひとまとめにして24時間シート綴りと一緒に挟み、常時確認出来るようにしている。	/	/	◎	介護計画はファイルに綴じられ、職員はいつでも計画やサービス内容を確認できるように なっている。介護記録は、日々の利用者の生活状況を記載するほか、介護計画に沿った サービス内容は#の印を付けて記録を残すことで、計画に沿った支援の実施に努め、他の 職員等が見ても、実施状況を確認しやすくしている。また、職員は日々の生活記録の記載漏 れなどが無いよう努めている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	ケアプランの実施状況は生活記録の該当項目に#をつけることで、把握できるようにしている。	/	/	◎	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じで見直しを行っている。	◎	3か月に一度見直しを行っている。	/	/	◎	介護計画は、3か月に1回見直しをしている。また、月1回モニタリングを実施するとともに、 状態の変化が見られない利用者にも、必ず現状確認をすることができている。訪問調査日には、 利用者の状態を丁寧に記録したモニタリング記録を確認することができた。さらに、入退 院などの大きな変化が見られた場合には、医師に相談するほか、家族の意向を聞いて職員 間で話し合い、現状に即した新たな計画の作成をしている。一部ICT化が図られ、介護計画 の過去の変更履歴など、いつでも確認できるように保存されている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	毎月のモニタリングにて確認している。	/	/	◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	大きな変化が見られた場合や、入退院等があった場合は都度見なおすようにしている。	/	/	◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	定期的なミーティングの他に、必要に応じて複数名の職員で当面の課題について話す機会を設けている。	/	/	◎	月1回、ミーティングを開催し、利用者の現状確認や課題などの話し合いをするほか、必要に 応じて、随時カンファレンスを開催し、利用者一人ひとりの課題解決や情報共有に努めてい る。また、事業所では技能実習生の受け入れに協力しており、コミュニケーションや情報共有 への意識が高く、職員間で話し合う機会も多い。ミーティングには、少しでも多くの職員が参 加できるように、事前に日程調整をするともに、参加できない職員には、会議録を閲覧して もらうほか、口頭で内容を伝達し、正確な情報共有に努めている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	出来るだけ多くの職員の意見が聞けるよう心掛けている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	◎	開催時間については、職員の意見を聞きながら14時～16時の間で設定している。	/	/	○	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	「申し送り事項」ファイルを使って文書及び口頭にて情報共有するようにしている。	◎	/	○	朝夕の申し送りの際には、申し送りノートを活用し、職員間で口頭で情報共有をしている。出 動時に、職員は申し送りノートを確認し、申し送りの後で従事することができている。事業所 では、申し送りノートの確認のサインなどは行われていないが、ただ単に押印やサインを促すこ ともなく、管理者は、「現在の方法で問題なく、情報伝達ができている」と考えている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	本人からの要望があれば、可能な限り叶えられるよう本人と職員で話しあっている。	/	/	/	日々の生活の中で、職員は可能な限り、利用者に複数の選択肢を提示し、自己決定してもら えるよう配慮している。入浴や排泄の際にも、職員は声をかけ、利用者の希望を確認した支 援に努めている。また、職員は利用者の性格等を把握し、一人ひとりに合わせた話題を提供 したり、意識して声かけをしたりするなど、生き生きとした言動や表情を引き出せるような支援 に努めている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	複数提案したり一緒に考えたりして、出来るだけ本人が選べる状況を作るようにしている。	/	/	○	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのベースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	他利用者に大きな影響のない範囲で、まずは本人にどうしたいか聞くようにしている。	/	/	/	
		d	利用者の生き生きとした言動や表情(喜び・楽しみ・うろたえ等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	◎	出来るだけ利用者同士の働き合わせが生じるような関わりになるよう努めている。	/	/	○	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	表情や仕草に加えてわかる範囲でのその人の過去の暮らし方も踏まえて判断するようにしてい る。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	研修にて学ぶ機会を設けている。 日々の業務において、職員間で注意喚起しあう場面もある。	○	-	◎	法人・事業所として、年間研修計画を作成し、計画に沿って利用者の尊厳やプライバシー保 護などを学び、全ての職員は意識した対応に努めている。訪問調査日には、研修内容等 を記載した研修実施記録を確認することができた。また、居室をプライバシーのある空間と認 識し、入室の際に、職員はノックのほか、事前に利用者へ声かけをしてから入室をしている。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	声かけは本人への分かりやすさとあからさまにならないような配慮のバランスを考えながら行う ようにしているが、時折配慮が足りない場面も見られる。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	職員のみが居室へ入る場合は本人に同意を得よう努めている。	/	/	○	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	研修にて学ぶ機会を設け理解するよう努めている。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	感謝の言葉は利用者と職員、あるいは利用者同士において日常的に聞かれおり、互いに助け合える関係になっている。	/	/	/	職員は、利用者同士の関係性を把握し、配席などを考慮している。言い合いなどのトラブルが発生しそうな場合には、早期に間に入り、利用者双方の意見を聞くなどの対応をしている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	理解している。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者間のトラブルは比較的時折見られ、職員は利用者同士の関係性を把握した上で都度関わりを持ち、大きなトラブルにならないよう動いている。	/	/	○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルがあれば間に入り、過度のストレスや遺恨が生じないように努めている。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	本人や家族から情報を得るようにしている。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていたりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	、コロナ禍で事業所への来所を控えてもらう必要があったが、法人内の別事業所の面会スペースを借りて面会を行った。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	△	基本的に来所時間の制限は設けていない。(先方の事情によっては、夜間だからと言って断ることもない。)外出については、コロナ禍のため事業所側から働きかけることは出来なかった。玄関先や中庭で過ごす等、外気に触れる機会は設けることができている。	○	-	△	コロナ禍が続き、外出制限が設けられていたため、積極的な外出支援はできていない。天気が良い日には、玄関先に出て外気浴をしたり、母体のクリニックにリハビリに出かけたりするなど、少しでも利用者が気分転換を図れるように支援している。法人・事業所として、運動会の開催を予定するなど、感染状況を見計らいながら、徐々に外出等のできる機会が増えていくことを期待したい。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	コロナ禍のため実施していない。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	研修で学び理解する機会を設けており、周辺症状が生じる要因については、それぞれのケースについて必要に応じて職員同士で相談しながら対応している。	/	/	/	職員は、利用者一人ひとりの生活動作を確認し、廊下の歩行やテレビ体操、ペダル漕ぎなどが行われている。希望する利用者には、母体クリニックで実施しているマシントレーニングを中心としたパワーリハビリに参加してもらうなど、利用者の心身機能の維持や向上に向けて取り組んでいる。また、利用者のできることは自分でしてもらい、職員は見守りや待つ介護に努めている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	生活リハビリを積極的に取り入れ、日常の中で楽しみながら維持向上できるよう努めている。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	◎	本人が出来ることはできるだけ本人に行ってもらうようにしている。環境整備も含めて、できるようになる可能性についても考えるようにしている。	◎	/	○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	把握に努めており、それぞれの力を発揮できる役割を出来るだけ見つけて継続できるように支援している。	/	/	/	洗濯物のハンガー掛けや取り入れ、行事で使用する道具の製作、清掃、テーブル拭き、縫い物など、職員は利用者一人ひとりの得意なことや楽しみのある役割や出番として担ってもらい、笑顔で過ごせるように取り組んでいる。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	結果ではなく課程を重視して、役割や出番を作るように努めている。	◎	-	○	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	把握するよう努めている。本人らしい服装の選択や持ち物というものをある程度把握出来ていると思う。				整容の乱れや汚れが見られた場合には、利用者の自尊心を傷つけないように、職員は声をかけ、さりげなくサポートをしている。重度の利用者にも、居室のみで過ごしてもらうことなく、基本的に日中には着替えてもらい、共用スペースで過ごしてもらえよう支援している。中には、居室で見られない言動が共用スペースで見られることもあり、必要に応じて記録に残し、介護計画の内容に反映させている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	◎	本人からの要望がない場合でも家族等に意見を聞きながら行っている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	◎	選べる方には選んでいただいている。重度の方でも、これまでの好みのスタイルが継続できるように過去の生活を振り返りながら支援している。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	TPOに合わせて選べるようにしている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくなりカパーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	あからさまにならないようにさりげなく整えられるように気を付けている。	◎	—	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	本人や家族の希望があれば家族の同行で行きたい店に行くことは可能であるが、コロナ禍のため、実施していない。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	重度になる前の状態が保てるよう努めている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	共有スペースからすぐ眺められる位置に台所がある環境下で、食事作りに少しでも利用者が関わられるよう意識している。				1週間交代で、職員が栄養バランスに配慮した献立を作成し、食材の買い出しにかけ、利用者に調理の下ごしらえや後片づけを手伝ってもらいながら、職員と一緒に調理をしている。各ユニットの献立は基本同じにしているが、利用者一人ひとりのアレルギーや嫌いな物、好みや食べたいメニューを把握するほか、メニューをアレンジするなどの対応もしている。2階ユニットでは、食べたいメニューをいう利用者も多く、一緒に献立を考えて、調理を行うことも多い。食器類は、事業所で用意した物を基本として使用しているが、希望する利用者には、馴染みの物を持ち込み、使用することもできる。食事の際に、利用者と同じ食事を希望して食べることができ、職員は見守りやサポートに専念し、別々に食事を摂るようになっていく。重度の利用者も共用スペースで過ごすことが多いため、調理の音や匂いを感じることができている。また、栄養士のアドバイスをもらうまではできていないが、医師から減塩などのアドバイスをもらったり、職員間で同じメニューが重ならないように話し合ったりすることもできている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	◎	下ごしらえ、洗い物、食器片づけなど、場面場面でそれぞれの利用者が役割をになっている。			◎	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	◎	同上				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	◎	コーヒーが苦手、酸っぱいものが苦手だが梅干しは食べられる、胆石症のため油物やコレステロールは避ける等々、個別に把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	食材費が高騰しているなかで、安い野菜イコール旬の野菜ということで、季節感は割とあると思われる。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	◎	利用者の状態に合わせた食事作りを心掛けている。本人の状態からやむを得ずミキサー食や刻み食に変更する場合には、検討期間を設けて試しながら、本当に本人の食事状態に適しているのかを職員間で話し合ってから変更するようにしている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	要望がある方には本人のなじみの食器を使ってもらっている。			◎	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	職員が利用者と同じものを食べるかどうかは職員自身に任せているが、現状同じ食事を取っている職員はいない(検査のみ)。様子観察とサポートは適宜している。			△	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	これから作る食事の内容を事前に伝えたり、下ごしらえを一緒に行いながら何に入れるのかなどの会話をしている。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	栄養やカロリー計算まではしていないが、食事作りの担当が都度変わること、過度に偏ることのない食事になっている。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	味を変えたりゼラチン等でゼリー状にするなど、出来るだけ無理なく摂取してもらえよう工夫している。一度に必要な量が摂れない方は、時間をかけて複数回に分けて無理なく摂取してもらうよう努めている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	メニュー作りは職員が持ち回りで行っており、同じようなメニューが続かないように心掛けて作成するようにしているが、栄養士等のアドバイスは受けていない。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	消毒等の衛生管理は業務の中に組み込んで、日常的に行っている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	理解して行っている。	/	/	/	食後に職員は声をかけ、共用スペースの洗面台を中心として、歯磨きなどの口腔ケアを実施している。中には、居室にある洗面台で口腔ケアを行う利用者もいるが、職員は口腔ケア時のほか、服薬介助の時を利用して、全ての利用者の口腔内の状況の把握に努めている。また、職員は見守りをしたり、スポンジブラシなどの口腔ケア用品を使用した支援をしたりするなど、利用者の状態に応じた対応をしている。さらに、異常が見られた場合には、家族に歯科医の受診のお願いをしている。歯科医などから直接指導を受ける機会は少ないが、職員は外部研修へ参加するなど、口腔ケアの重要性を学ぶことができている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	概ね把握している。	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	口腔ケアに関する資料にて学んでいる。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	夜間の洗浄・消毒等、利用者の義歯の清潔を保てるよう支援している。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	歯磨きの声掛けに加えて、歯ブラシや口腔スポンジ等を活用して、口腔衛生に関する支援を行っている。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	自分で行けない方には適宜誘導するなどしている。おむつやパッド類の使用についても使用の是非については慎重に話し合い、やむを得ず使用する場合は家族にも相談するようにしている。	/	/	/	事業所では、なるべくおむつに頼らず、利用者がトイレで排泄でき、おむつ外しができることを目標とした支援に努めている。朝夕の申し送り時のほか、毎月のミーティングを活用して、利用者の排泄状態などを踏まえて、職員間で適切なパッドや履くパンツなどの排泄用品の使用などの話し合いをしている。中には、排泄状況を考慮して、夜間のみおむつを使用している利用者もいる。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	◎	身体的な要因をはじめ、生活習慣(運動不足)、ストレス等の様々な要因を考えながら便秘解消に努めている。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	排泄・水分チェック表に都度記録を残すことで、基本的なパターンを把握している。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	基本的にはおむつ等を使用しなくて済む方法を考えるようにしており、その方法が本人にとってどうかという考え方でおむつ使用の是非について検討するようにしている。本人と相談する場合もある。	◎	/	○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	◎	本人と相談して通常のトイレを使用できるADLではあったが座面の低いポータブルトイレを使用することで排尿がしやすくなった例がある。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	◎	排泄・水分チェック表を適宜確認しながら声掛けや誘導のタイミングを図っている。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	◎	おむつ等を使用する場合には、使用の理由やタイミング(日中と夜間の状態の区別等)について家族に説明し同意を得ている。精神疾患によりADLの短期・中期的な変化がある利用者などは、本人の状態によっておむつ類の使い方を都度変更している。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	利用者一人一人の状態に合わせて使い分けしている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	◎	適度な運動を促したり、牛乳や食物繊維の摂取を進めるなどしている。便秘時は腹部の温めやマッサージをしている。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	○	基本的には事業所の事情の範囲内になる事もあるが、その中でも出来るだけ利用者の選択ができるよう努めている。 「今なら、これができます。後なら、これが出来ますけど、どうされますか？」等。	◎	/	○	週3回、利用者は午前中の時間帯に入浴をすることができる。中には、入浴を拒む利用者もいるが、無理強いすることなく、職員を変えて声かけをするなど、気持ち良く入浴してもらえるような工夫をしている。また、利用者には自分でできる部分の洗身をしてもらい、職員はできない部分のサポートをしている。さらに、入浴前にはバイタルを確認するとともに、一人ひとりの入浴状況を記録に残すことができている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分で入浴できるよう支援している。	○	利用者が入浴に何を求めているのかは、考えながら入浴支援をしている。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	出来るところは自分でしてもらうように声掛けしながら、浴室内の危険性を理解したうえで必要に応じて介助している。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	声のかけ方や、声を掛ける職員を変えてみたり、タイミングを変えるなどしている。羞恥心の問題や恐怖心等、要因についてもどうすれば緩和できるかを考えながら行っている。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	本人の様子や普段との違い、直近のバイタルチェック表等を参考にしながら入浴の可否を決めている。入浴後は休める環境を整え、湯冷めや脱水、血圧変動等にも配慮している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	24時間シートにて睡眠の状況を把握するとともに、夜間の様子については申し送りにて情報共有している。	/	/	/	24時間生活変化シートに記録を残し、職員は利用者一人ひとりの睡眠状況を把握している。中には、眠れないことが続くため、健康面を考えて、医師に相談して眠剤を服用する利用者もいる。また、できる限り日中に起きて過ごしてもらい、外気浴を取り入れるほか、体操やレクリエーションの活動量を増やすなど、職員は安易に服薬に頼らず、夜間に利用者が安眠できるような支援に努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	出来るだけ日中の活動を促すことで、夜間の睡眠の質を高めるよう努めている。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	日中の過ごし方が睡眠に及ぼす影響をまず考えたうえで、必要に応じて医療の力も借りる方向で検討するよう心掛けている。	/	/	◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組みんでいる。	◎	自分で動けない方は、適宜居室やソファでくつろげる環境を持てるよう支援している。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	電話をかけたという利用者には、掛けられるよう支援している。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	◎	同上	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	同上	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのまませず音信がとれるように工夫している。	◎	本人に渡して伝えるようにしている。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	家族への協力を依頼して、協力してもらっているケースもある。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	△	自分でお金を所持している利用者はいないため、理解する場面に乏しい。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	△	コロナ禍のため実施していない。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」など一時的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	利用者がお金を所持する場合は、ご家族に利用者が自分でお金を所持する場合のリスク(紛失の可能性・紛失したと勘違いする可能性・思い込みにより盗られたと思う可能性など)を説明したうえで所持してもらうようにしている。その上で、現状所持している利用者はいない。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	◎	預り金の使用については都度家族に使用の目的を説明し、同意を得ている。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	預かり金規程を設け、同意を得ている。 金銭の使用があれば、その都度出納帳をつけ、本人やご家族の求めがあればいつでも見てもらえるようにしている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	協力医療機関のPTにリハビリに關しての相談をしている。	◎	/	○	コロナ禍が続き、外出や面会などの制限が設けられ、法人の方針もあり、外出に係る個別ニーズへの対応は十分にできていない。利用者一人ひとりの身体機能を維持するため、母体クリニックの理学療法士からリハビリの助言をもらうなど、可能な範囲で既存サービスに捉われない支援の提供にも努めている。
(3) 生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	玄関先には花や木製のベンチを置いて入りやすい雰囲気を作るようしている。特に建物に入る際の制限は設けておらず、誰でも自由に訪れることが出来るようになっている。	◎	—	○	事業所の敷地内には、玉ねぎや大根などの野菜を栽培している菜園があるほか、玄関先には、職員と利用者が一緒に花を育てるなど、家庭的な雰囲気が感じられる。また、玄関にはスロープも設置され、明るく来訪しやすい雰囲気づくりをしている。

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	◎	殺風景な雰囲気にならないよう、ソファ等の配置は気を付けている。	◎	—	○	共用スペースは、職員が毎日共用スペースの清掃を行うほか、整理整頓や換気が行き届き、快適な空間となっている。利用者の動線を確保するために、極力廊下などには物を置かないほか、家具の配置などの配慮をしている。また、共有スペースにはキッチンが設置され、生活の中で調理の様子を感じられるほか、窓から中庭の木々や野菜の生育状況などの様子が眺められ、利用者の五感に働きかけられている。今後は、壁面に季節を感じられる掲示を行うなどの装飾に配慮し、より家庭的で温かみのある工夫が行われることを期待したい。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	毎日、掃除している。	/	/	◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	台所が共有スペースに向けて開放してある作りのため、調理の様子や匂いを感じながら過ごすことが出来る。 廊下の窓から中庭が見える場所があり、廊下を歩きながら中庭で育てている野菜の育成について会話したりしている。	/	/	○	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	共有スペースを中心に東西に利用者の居室が配置されており、居室にいながらも人の気配を感じられる作りになっている。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	使い慣れたものは自由に持ち込んでいただいている。 本人の状態によって使い勝手が変わったものについては家族に依頼相談して、交換するよう努めている。	◎	/	○	居室には、ベッドや洗面台、エアコン、押し入れを設置している。利用者の希望に応じて、馴染みの物を持ち込むこともでき、テレビや健康器具、仏壇、趣味に関わる書籍などを持ち込む利用者もあり、好みを反映された居心地の良い空間づくりをしている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	利用者の導線を意識しながら、不要な障害物がないように配慮しつつ、ある程度の「狭さ」も確保して、歩行時の安心感やふらつき時に自分で支えることができるような環境づくりを心掛けている。	/	/	○	利用者が認識しやすいように、事業所内のトイレや居室などのドアの色分けを行うなどの工夫をしている。また、廊下などには不要な物は置かず、車いすの利用者もゆったりと移動できるような動線が確保されている。さらに、共有スペースには、ぬり絵の用具や本など、利用者の手の届くところに物を置いている。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	◎	特別の危険があるもの以外は、ある程度手の届くところに置いている。裁縫道具など危険を伴うものは手の届かないところで管理しているが、求めがあればすぐにお渡しできるようにしている。	/	/	/	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけなくても済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	◎	職員は、日中施錠していないことが当たり前の状態で利用者の生活を見守っている。外に出ようとする利用者がいた場合でも、あわてて止めるのではなく、さりげなく外に出る目的を聞いたり、そうなるに至るまでの本人の思いを探る努力をしている。	◎	—	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を理解している。日中に玄関は開放され、夜間のみ防犯のために施錠をしている。また、ユニットの入り口には、センサーが設置され、職員は利用者や来訪者などの出入りの状況を把握しやすく、余裕をもって対応することができる。さらに、帰宅願望のある利用者には、職員が寄り添い、気分が変わるような話題提供をするなどの工夫をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	日中の施錠をしないことについては家族に説明し理解を得ている。ご家族が施錠を望むケースは今のところないが、もしあれば話し合いの中で理解を得られるよう努める。	/	/	/	
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	◎	利用者ごとのファイルに病歴や現病をまとめてあり、把握できるようにしている。	/	/	/	
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	普段との違いがあれば記録に残すとともに、その場にはないスタッフでも把握できるように申し送りをするよう努めている。	/	/	/	
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	協力医療機関とは毎日利用者の心身の状況についてのやり取りをしており、随時相談に乗ってもらえる環境になっており、重度化防止や適切な入院支援の体制が出来ている	/	/	/	
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	専門の病院等、必要に応じて本人やご家族が希望する医療機関や医師に受診できるようにしている。	◎	/	/	
		b	本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	必要な情報の提供を行いながら、適切な医療が受けられるよう努めている。	/	/	/	
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	受診前後にはご家族に連絡をするようにしており、必要に応じて本人やご家族の合意を得るようにしている。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	グループホームでの本人の様子や入院中に予想される事象、食事・入浴・排せつ・ADL等の基本情報など、可能な限り提供するようにしている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	入院期間中も、医療機関やご家族と本人の状況についてやり取りを重ねている。早期退院についても受け入れの状況を説明しながら、都度話し合う機会を設けている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	協力医療機関とは、毎日利用者の心身の状態や変化についてのやりとりをしている。協力医療機関の医師も看護師も利用者の状況を把握してくれており、日常的に相談ができるような環境になっている。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	協力医療機関とは午前、午後に必要なに応じて異変がある利用者の情報を伝えとともに、急な発熱やその他急変時においても、24時間相談し、指示を仰げる体制になっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	日々の状態の変化は記録に残し、訪問看護や、定期的な通院、日々の医療機関とのやり取りにより医療職に情報を提供することで早期発見・治療につなげられている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	利用者が使用する薬の説明書は、利用者の個人ファイルに分かるように閉じ、すぐ確認できるようにしている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	内服タイミングごとに薬を出し、名前や数を確認するなど、飲み忘れや誤薬防止に努めている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	利用者の普段の様子を把握することに努め、状態の変化に注意して観察している。24時間シートによる具体的な様子および排泄・水分チェック表、体重表等による数字での把握など。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	重度化した場合の指針を作成しており、入居時には説明して意向の確認を取っている。				事業所では、「看取りに関する指針」を整備し、入居時に家族等に看取り支援が可能なことを伝え、同意を得ている。近年、看取り支援の実績はないが、医療法人ということもあり、日頃から医師等との連携が図られるなど、重度化や終末期への支援体制が整っている。重度化した場合には、医師や看護師から指示を仰ぐとともに、家族を交えて関係者で話し合い、方針を共有している。また、利用者の状態は、1日3回母体クリニックに連絡を入れて情報共有を図るとともに、急変時にも迅速な対応にも役立っている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	かかりつけ医の医師や看護師にも指示や意見を仰ぎながら方針を立てている。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	適宜助言をしながら行うよう努めている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	できること・できないことについては説明をして理解を得るようにしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	対応についての方針や、生活の変化に伴う新たな課題などについて家族と話し合っている。かかりつけ医とも、日々の状態について毎日報告しながら、本人の状態についての相談ができる体制になっている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	重度化や看取りの場面においては特に家族との連絡を密にし、ご家族の心情を理解するよう努めている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	研修にて定期的に学ぶ機会を設けている。新型コロナウイルスについても、協力医療機関から最新情報を入手するなどして把握するよう努めている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	◎	感染症対策に関する研修を実施している(防護服の着脱訓練等。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	協力医療機関から最新情報を入手するなどして把握するよう努めている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	職員は標準予防策の徹底をしており、来訪者に対しても玄関先での手指消毒や検温、マスクの徹底とソーシャルディスタンスの確保をお願いしている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	◎	来所持や電話連絡の際には利用者の生活状況を伝えながら、意見を求めるようにしている。				コロナ禍以前は、家族に参加を呼びかけて、事業所の行事などに参加協力をしてもらうことができていたが、コロナ禍が続き、現在は感染対策のために、家族が参加できる行事の開催は自粛をしている。管理者は、「感染状況を確認しながら、徐々に家族との交流を再開させたい」などと考えている。家族等との面会は、マスクをしたままで、少し間を開けて対応をしている。また、家族には介護計画のモニタリングの後に、電話連絡を活用して利用者の状況を伝えるほか、来訪時に日々の様子を詳しく伝えるなど、家族との関係性が途切れないような工夫をしている。利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職などの異動を含めた出来事などが十分に家族に伝わっていないことが窺えるため、担当職員の退職や交代を家族に報告したり、運営推進会議を活用して、事業所の出来事を報告したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	△	コロナ禍のため実施していない。	◎		△	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	来所持や電話連絡時に出来るだけ詳細に伝えるようにしている。	◎		○	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等)についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	「本人の望む姿」と「家族が望む本人の姿」にはギャップがあることを伝え、落としどころを探るように努めている。				
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	×	現状、出来ていない。	×		×	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	◎	自由とリスクの関係については入居時および必要に応じて家族に説明するようにしている。				
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	コロナ禍でも出来るだけ本人を交えて近況を報告し、要望や意見が聞けるようにしている。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時には具体的な説明を心掛けている。内容の変更等があれば説明し、書面にて同意を得るようにしている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	しっかりと話しあうよう努めている。				
Ⅲ.地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	×	実施できていない。		-		コロナ禍が続き、外気浴の際に、近隣住民へ挨拶や会話を交わす程度に留まっている。以前は、歌などのボランティアを受け入れたり、中学生の職場体験に協力したり、利用者と一緒に地域行事に参加するなど、交流を図ることもできていた。コロナ禍の収束後には、感染状況を見計らって、地域住民との交流が徐々に再開されることを期待したい。また、外部評価の地域アンケートに協力してもらうことができていないため、コロナ禍の収束後には、運営推進会議の参加メンバーに協力を呼びかけるなど、出された意見をサービスの質の向上に反映されることを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	ゴミ捨てや出退勤時に、すれ違う地域の方には挨拶をするよう心掛けている。		-	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	△	増えていない。				
		d	地域の人々が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	×	ほとんどない。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	△	回覧板を持ってきた方とあいさつをする程度で、遊びに来るといところまではいっていないのが現状。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	歌会の実施などをボランティアにお願いしていたが、コロナ禍のため中止している。ボランティアの方に庭木の剪定をしてもらっている。				
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	△	古川は人口も多く、近所にはスーパーや学校、公民館も近くあり、地域資源は豊富にあると思うが利用者の力の発揮や豊かな暮らしを楽しむことには十分つなげられていない。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	コロナ禍のため、職員のみで開催していたが、今後は少しずつ以前の状態に戻すよう取り組む予定。	○	/	△	コロナ禍が続き、運営推進会議は職員のみでの開催となっている。家族等へ議事録の送付は行っており、来所時に確認してもらうに留まっている。コロナ禍の収束後には、全ての家族に会議の参加案内を送付したり、会議の終了後には、会議に参加できなかった家族や参加メンバーに議事録を送付したりするなど、より多くの参画を得ながら、有意義な会議となることを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	サービス評価実施後は、報告するようにしている。	/	－	○	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	コロナ禍のため、職員のみで開催していたが、今後は少しずつ以前の状態に戻すよう取り組む予定。	/	－	/	
Ⅳより良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	事業所理念は事業所内に見える場所に掲示して皆で共有し、日々のケアにあたるうえでできるよう努めている	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	△	利用者や家族には契約時に、地域には運営推進会議で伝えているが、伝わっているかはわからない。	○	－	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	◎	ミーティングや内部研修により、職員のスキルアップが図れる体制づくりに取り組んでいる。	/	/	/	医師である代表者は、事業所に往診等で来訪があり、利用者や職員から意見を聞くこともある。法人として、年間研修計画を作成するほか、計画に沿った内部研修等を職員は受講することができ、働きがいやスキルアップに繋がっている。また、日頃から管理者は、職員とのコミュニケーションを大切にして、支援方法などを職員と話し合いをするともに、職員間の情報共有に力を入れることで、働きやすい雰囲気づくりに努め、職員同士の良好な関係に繋がっている。さらに、職員は管理者と話しやすく、気軽に相談することができる。加えて、シフト作成の際に、希望休などの要望を聞くほか、希望がない場合にも管理者等は職員と相談して、有給休暇等の取得を促すなど、働きやすい職場環境づくりに努めている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	管理者は他の職員とともにケアにあたりながら職員の働き方を見たり仕事上の課題について相談を受けるなどしながら、日常的にOJTを実施している。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	◎	処遇改善加算、特定処遇改善加算、ベースアップ加算を取得できる体制をつくり、年2回の個人評価等に基づいて各職員の目標や努力実績を評価している。有給休暇取得の促進も行い、職場環境の整備改善に努めている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	地域密着型サービス協会に加入している。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	◎	有給休暇の取得等に積極的に取り組んでいる。	◎	－	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	◎	内部研修や事業所ミーティングにて定期的に学ぶ機会を持ち、理解するよう努めている。 虐待・身体拘束防止対策委員会にて毎月話し合う場を設けている。	/	/	◎	事業所には、虐待防止に関する委員会が設置され、定期的に虐待や不適切な言動の防止などの研修を実施するほか、職員間で話し合いをしている。訪問調査日には、委員会議事録や研修実施報告等から、事業所の虐待防止への取り組み状況を確認することができた。また、不適切な言動が見られた場合には、管理者等に報告するとともに、該当職員に確認し、指導や注意喚起をしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	日常的な申し送りや、事業所内ミーティングにて話し合う機会を設けている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	事故等が続いた場合は、職員全体で振り返る機会を持つよう促し、または実施し、影響がないかを都度確認している。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	内部研修にて定期的に学ぶ機会を設けるとともに、虐待・身体拘束防止対策委員会に振り返り法人全体で振り返るよう努めている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	虐待・身体拘束防止対策委員会にて定期的に法人内の各事業所がケースを持ち寄り、検討するようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	現状、要望はないが、必要があれば話し合いを行い理解を求める。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	○	研修等で学ぶ機会を設けている。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	既に後見制度を利用している利用者の司法書士と、定期的により取りをしている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	急変時対応マニュアルを作成し、周知している。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	ミーティングやそれぞれの職員の過去の経験などを話し合い事例に応じた応急処置や初期対応を学べるようにしている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	事故やヒヤリハットは、発生を確認したら報告書を作成し、話し合いを行い対策を考えている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	◎	事業所内のミーティングや現場の職員による話し合いにて行っている。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	苦情があれば個別に対応した上で管理者・法人に報告し、さらなる対応を行って問題の解消に努めている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	速やかに対応し、解決するよう努めている。必要があれば市町にも報告・相談を行う。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過と結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	◎	苦情があれば傾聴し、対応策について説明して話し合い、結果や経過を報告するようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	◎	苦情相談窓口を重要事項説明書に記載し、入居時に説明して。	◎		◎	日々の生活の中で、職員は利用者から意見を聞き、可能な範囲で対応をしている。また、入居時に苦情受付窓口を利用者や家族等に説明するほか、来訪時や電話連絡時等を活用して、職員は家族から意見や要望を聞くように努めている。事業所の各ユニットには、苦情箱が設置され、定期的に確認しているが、ほとんど意見や苦情などが入ることはない。さらに、管理者は職員とのコミュニケーションを大切に、日頃から意見や提案などを聞き取るよう努めている。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	◎	契約時には相談窓口について説明している。 意見箱を玄関先に設置し、いつでも要望等を受け付けるようにしている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどで職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	◎	日常的に職員と接し、話が出る機会が設けられている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	日常的に話ができる機会があり、提案等を受けている。			◎	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	理解するよう努めているが、職員全員での取り組みはまだ不十分。				外部評価の結果や目標達成計画は、運営推進会議の中で、参加メンバーに報告するとともに、事業所内に掲示して周知をしている。また、ミーティング等を活用して、評価結果を職員に周知するとともに、目標達成計画を作成し、達成に向けて取り組んでいるが、全ての職員で自己評価を作成するまでには至っていない。コロナ禍の収束後には、家族や会議の参加メンバーに呼びかけて、目標達成の取り組み状況などのモニターの協力をしてもらったり、サービスの評価結果や目標達成への取り組みの意見交換をしたりするなど、出された意見等をサービスの向上に繋げられることを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	評価により出た課題を意識して今後の行動につなげるよう努めている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	外部評価結果と目標達成計画は事業所の玄関に置き、いつでも閲覧できる状態になっている。 取り組みのモニターはしてもらっていない。	○	－	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	できていない。				

項目 No.	評価項目	小項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	◎	災害時対応マニュアルを作成し、周知している。	/	/	/	事業所として、災害対応マニュアルを作成し、職員に周知している。定期的に、避難訓練を実施しているが、コロナ禍が続いていたこともあり、関係機関と連携した災害対策を行うことができていない。ハザードマップの対象地域で、事業所として、避難確保計画を作成しているが、事業継続計画(BCP)までは策定できておらず、今後実効性のある計画策定を予定している。法人内の各事業所と連携を図るほか、地域の自主防災組織と繋がりを深めるなど、関係機関との連携に向けたさらなる取り組みが行われることを期待したい。コロナ禍が続き、事業所への家族の来訪が少なかったこともあり、利用者家族等アンケート結果から、災害への備えに対して十分な理解が得られていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、避難訓練の様子の写真を事業所内に掲示したり、家族や地域住民、運営推進会議の参加メンバーに避難訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族等への安心安全な取り組みが理解してもらえるように、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	◎	定期的に訓練を行っている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	定期訓練時に行っている。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	×	コロナ禍のため、実施していない。	×	－	△	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	コロナ禍のため、実施していない。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	例年は地域フォーラムを開催して行っているが、コロナ禍のため現在は実施していない。	/	/	/	同一の法人内に、地域の高齢者やその家族等への相談支援を行う事業所があり、相談対応は当該事業所に対応している。直接、事業所に入所などの相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。コロナ禍において、市行政や地域包括支援センターが主催する会議や研修に参加する機会は減少しており、会議や研修に参加する機会は減っているが、法人内の他のグループホームのほか、関係機関との連携に努めている。法人と協力して、地域住民を対象に、以前は「地域フォーラム」を開催することができていたが、コロナ禍が続いていたため、現在は開催が自粛されていることもあり、コロナ禍の収束後には、地域フォーラムの開催を再開したり、地域包括支援センター等と一緒に、地域活動を協力したりすることを期待したい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	△	相談があれば受け付けるようにしている。	/	－	○	
		c	地域の人が集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	△	今のところ、特に活用はされていない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	外国人技能実習制度を利用して外国人実習生の受け入れを行っている。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	×	特別なことは行っていない。	/	/	○	